

## 一 朝の風景

明け六つの鐘が鳴る頃、廊下に面した障子戸の方から、鳥の鳴き声がした。

まだ、外は暗く、部屋の中はひどく冷えている。

ゆきは、顔まですっぽり被った布団の中で、二度、三度と瞬きをしてから、縮こまっていた手足をうんと伸ばした。吸い込む空気の冷たさに、思わず息を詰める。

僅かばかりだが、目が覚めてきた。

それでも、どうにも布団から出る勇気が出なくて掛け布団を身体に巻き付けたまま躊躇っている、二間続きになった部屋の反対側から物音がする。

いつも朝になると火鉢を持ってきてくれる女中に違いない。

コトリと音を立てて、障子戸が僅かに開くと、案の定、見知った女性が顔を覗かせた。

「…神子様」

最初は小声で、まだ眠っているかもしれないゆきを氣遣

つて声をかけてくれる。

「はい、起きています」

返事をする、初老の女中は笑みを浮かべた。

「おはようございます。お目覚めでしたのね」

「おはようございます。でも、私まだお布団の中です。こんな格好でごめんなさい」

「いえいえ、今日もお寒うございますものね。火鉢をお持ちしましたから、すぐに暖かくなりますよ」

「ありがとうございます」

いつものやり取りをしながら、女中は少し離れた場所に火鉢を置くと、廊下の方に向かい、障子戸を開けた。

「少しだけ、朝の空気を入れましょう」

ひんやりとした空気が部屋を満たして、今度こそは、しっかりと目が覚め、頭も冴えてきた。

「このあと、お召し替えなさったら朝餉をお持ちしますが、よろしいですか」

「今日は、リンドウ…斉基さん、ご都合悪いのですか」

「旦那様からは、本日は登城されるので、神子様にはゆっくり過ごされるようにと申しつかっております」

「もう起きてらっしゃいますか」

「はい。自室で一刻ほどお過ごしになってからお出になられるとのことですよ」

「私、先にご挨拶してきます。朝ご飯はそれからいいですか」

「もちろんでございます」

「じゃあ、お願いします」

女中に礼を言ってから、早速身支度を整える。

着るのは変わらずの神子装束で、時々、リンドウからは苦言を呈されることもあるが、動きやすいので重宝していた。それに、江戸での神子の評判を考えれば、着ていた方が便利な場合もある。

ひとしきり身なりを整えた後、鏡台の前に座って髪を梳く。櫛は黒い漆塗りの立派なもので、かつて世界が合わせ世となるのを防ぐために奔走していた頃に、怨霊退治のお礼として貰ったものだ。同じく漆で描かれた絵柄が大人っぽい意匠で気に入っていた。

「よし。完成」

立ち上がってから、くるりと回って身なりを確認する。それが済んだら、向かうのはリンドウの部屋である。



起き出してから、身支度もそこそくにリンドウは自室で書を広げていた。

あと一刻もしたら、邸を出なければならぬ。

龍神の神子の尽力もあり、真つ二つに分裂しようとしていた幕府は、ひとまずは慶喜のもと、団結を取り戻そうとしていた。

年が明けてしばらくして前の將軍、家茂から將軍位を讓位された慶喜は、現在江戸城で精力的に政務に取り組んでいる。何しろ問題は山積しているのに、内輪もめがあつたせいで、処理がまったく追いついていない。元々多忙な人ではあつたが、今やこの国で最も忙しい人物といつても過言ではないだろう。

かく言うリンドウも、その慶喜に重用されている……と言えば耳障りがいいものの、様々な雑事も含む諸々を押しつけられて、目が回る忙しさだった。

自ら願って、この世界に慰留した龍神の神子。

蓮水ゆきとは、同じ邸に住み、何となく将来を誓った仲ではあるが、正直、星の一族としての任務を優先して付き従っていた頃の方が、まだ一緒にいる時間が長かったに違いない。

そんなリンドウの生活をしばらく見ていたゆきは、朝餉を共にすることを提案してきた。言い換えれば、朝餉『だけ』は一緒に……という小さな約束だ。

ただ、幕臣として仕えている以上、どうしたって城仕え

の身に合わせた生活様式にならざるを得ない。

今日だって、冬の寒い朝っぱらから登城予定だった。おまけに、執務に必要な準備が整い切っていないから、とてもゆつくり朝餉を食べる時間もなく、こうして文机に向かっているのだった。

（神子殿には、そのうちお詫びをしないとなあ…）

理由はどうあれ、彼女との約束を破っている以上、申し訳ない気持ちはリンドウにだってある。

小さくため息をついて、再び手元に目を移すと、知った氣配が近づいてきた。

襖戸越しに問われる。

「リンドウさん、入ってもいいですか」

「どうぞ」

返事の後、そろそろと襖が開かれて、ふわりと甘い彼女の香りがした。

「リンドウさん、おはようございます」

「おはよう、ゆき」

「今日は、登城されるんですね。お忙しいですか」

案の定、彼女がやって来たのは果たされなかった約束に對する確認の為だ。

「ごめんね。ちよつと立て込んでいて、この様だよ。埋め合わせはまた今度」

「…それなら、簡単に食べられるもの、貰ってきますね」  
「助かるよ、神子殿」

ゆきが微笑んで立ち上がった。それを見送ってから、また視線は書見台に向ける。

多分、言いたいことはあつただろうけれど、飲み込んで微笑んでくれた。希有な女性だと思う。優しく、慎ましいけれど、芯は強い。

でも、早くも古女房のように世話を焼かれるのも、事情を汲みすぎるほど汲まれてしまうのも、何だか寂しいものだった。

どうしてこんなことになっているのだろう。

（まあ、理由なんて幾らでもあるけれど…）

表向き、双方合意の讓位であつた。というのに嘘は無い。だけれども、派閥の溝というものは深く、そう簡単に解消されるものでも無いのだ。

新たな將軍の立場を固める為にも、ここで弱音を吐いて怠ける訳には行かなかった。

何しろ、ここに至つて京の本家からは、手のひらを返したように幕府への助力を強く言い含められているし、何より、ゆきが安心して暮らせるようにする為にも、さつさと懸念事項は解消しておくに限る。